

つたえよう つなげよう 安居の郷

安居公民館

1 安居地区の概要

福井市の中心部より西方約8km、東西に細長い14の町が接続している中山間地で、南側に未更毛川が流れ、ホタルの生育に適した区間では、夏の風物詩としてホタルの乱舞が楽しまれている。北側は、標高200mの安居山脈（通称西郷林道）が東西にそびえている。

明治22年に市町村制がしかれ、今日の安居地区のもととなる丹生郡西安居村として誕生、昭和29年福井市に編入し現在に至っている。

昭和40年代後半に団地の造成が進み、それまで8町であったところ、平成19年には14町に増加し、福井市のベッドタウンとして発展している。また、平成7年から「福井市総合運動公園」の整備が進められ、平成21年までに、野球、ソフトボール、サッカー、グラウンドゴルフ、テニス等の会場整備が終わり、多くの利用者で活気づく町に変貌している。

歴史をひもとくと、北堀貝塚をはじめ安田町足高山古墳群、末町須恵器の出土、本堂町の高雄神社神事等文化財として価値のあるものが多く存在している。

令和6年1月1日現在、人口は3,015人、世帯数は1,145戸となっている。

2 自然が息づく里地里山

(1) みんなで守ろう ホタルが舞うまち

安居地区は、福井市では市街地から一番近くでホタルの乱舞がみられるまちとして知られるようになった。昔はそこかしこに普通に見られたホタルが、時代と共に変わっていく自然環境の中で減少する危機を感じ、公民館や安居の里を守る会を中心に、平成21年から保全活動を進めてきた。

ゲンジボタルを育む未更毛川のクリーン作戦は、安居ふるさと創り委員会が主催し、年一回各自治会協力のもと地域をあげて行われている。

ホタルの乱舞が多く見ることができる期間を「ホタルウィーク」と位置づけ、観察の受け入れや小学生の

観察会、郷土料理の提供・郷土資料室の見学・ホテルの話を一連の流れとした「安居の里おもてなしツアー」、音と光のハーモニーコンサートなどを展開し、地区内外に情報を発信。「安居のホテル」が知れ渡るようになり、地区外からも大勢の方が見に



来られるようになった。そこで、初めての方でも道が分かりやすいように、ホテルロードにソーラーライトを設置し、好評を得た。発生期間のピークは2週間程度であり、数日で発生状況が変わるので、SNSでの情報発信も心掛けている。



【安居の里おもてなし膳】

(2) 絶滅危惧種ミズアオイを育む田んぼづくり



この地域は昔から米づくりが盛んで、人々は農業を生活基盤の一部としてきた。ミズアオイは田んぼや沼地に生える水草で、かつては里山でよく見られたが、機械化による乾田化や除草剤の使用で個体数が減少し、県の絶滅危惧種に指定された。県内で自生しているのは数カ所のみである。そのミズアオイが当地区に自生しているのが発見され、安居地区壮年会と公民館が主

体となって保全活動が始まった。

自生株から採種したものを保存し、翌春その種を蒔き育苗し休耕田に移植している。平成25年からは、有機農法でミズアオイと育つ古代米(黒米)づくりにも取り組んでいる。収穫した黒米はもち米種であることから、地域のイベントで餅つきをしたり「ミズアオイと育った黒米もち」としてイベントで販売したりと、地域の活性化に一役をかっていている。黒米は、市農政企画課主催の越前ふくいマルシェ会場で「ミズアオイと育った古代米」として広く販売することが出来た。昨今は小中学生にも注目され、地域の豊かな自然環境の象徴として、ホテルと共に、郷土学習のテーマとなっている。



3 福井県無形民俗文化財「オシッサマのお渡り」

(1) チームモアイが盛り上げるモアイフェス

「オシッサマのお渡り」は、安居地区の高雄神社の例祭として毎年10月の第2土曜と日曜に開かれている。宵の宮に祀られている猿田彦と天鈿女(オシッサマ)の二神が、約800m離れた松手の宮へお渡りする神事である。獅子頭をかぶった「オシッサマ」が、太鼓や童歌とともに町内を練り歩く。800年以上の歴史があるとされ、県無形民俗文化財に指定されている。

地区の青年団や市の若手職員有志らで結成されたチームモアイは、このまつりを盛り上げるため、本日祭夜のイベント「モアイフェス」を行い地域の方に参加を呼びかける。近年、国内の伝統的まつりの存続が危ぶまれている中で、オシッサマのお渡りも同様、次世代に繋げていくことが重要な課題となっている。まず、担い手となる子供たちの楽しい体験とその記憶がカギとなるのではないだろうか。

(2) 進化する資料室“あごっと”

安居公民館には郷土資料室が隣接されている。地域の方から寄贈された昔の農機具や生活用品、古銭など様々な昔の品が展示されている。平成7年に設立されたが、年月が経つにつれ展示品は乱雑になり、地域住民から、安居地区の歴史を知る資料室としてもっと有効に活かそうという声があがり、安居みらい塾が立ち上がった。以降、陳列の見直しや、地形を表すジオラマの作成、ホテルコーナーの設置などを手掛けた。近

年では、先に記述した“オシッサマのお渡り”コーナーを設置。和紙人形を使って“お渡り”を表したものは大変好評だった。又、その他地区の特徴的なまつりに関する展示コーナーを設けるなど、年々進化し続けている。



4 つなげよう交通ネットワーク「あごころ」

以前、安居ふるさと創り委員会が生活に関するアンケート調査を行った。結果、当地区は自然が豊かで地域の繋がりもあり住みやすい。一方、交通の便が悪く、老後、車の運転ができなくなった時の通院や買い物が



心配だ、という声が多数寄せられた。車の保有は大きな費用がかかり、難しい問題として棚上げされていた。が、

令和2年、この重要な地域課題に公民館・ふるさと創り委員会・地区社協などがスクラムを組んで取り組み、地区の自治会や老健施設などの協力を得て、お買い物バス「あごころ」の運行が始まった。

5 終わりに

ホテルや絶滅危惧植物が息づく豊かな自然が残されている安居。古来より受け継がれる伝統的まつりに地域が集う安居。そんな素晴らしい地域であると同時に、その裏では、鳥獣被害の問題、ひしひしと押し寄せる少子高齢化に伴う担い手不足、と課題は山積みである。又、近年地震・洪水と自然災害が増加している中で、防災は喫緊の問題である。多様な課題に取り組み持続可能なまちをつくる資源は、やはり人。コロナ禍で地域の絆の希薄化を感ずる中で、公民館は、人々が集い学ぶ拠点としての機能を高め、地域住民に寄り添って活動することが大切だと実感する。

豊かな自然、歴史ある文化、これらを次世代につなげようという地域の思い。「つたえよう つなげよう 安居の郷」まちづくりのスローガンには、その思いが込められています。その中で、急速化する少子高齢化。今後、更に、世代を超えたまちづくりの活動が重要なポイントとなってくると思われます。